

ザビエルの道再考

一文献を広く深く読むと一

令和 6 年11月 7 日

平井 義人

はじめに

日出町では「ザビエルの道ウォーク」がさかん

しかし、学術書ではザビエルは山口から海路で府内に入ったとの説が支持され、2000年以降の学術書は全て海路説となっている

どちらが本当なのだろうか？

1 ザビエル来訪の概要

天文18年(1549) 7月?	ジャンク船で鹿児島坊津に上陸 鹿児島で布教活動
天文19年(1550) 8月	平戸に入り布教活動
11月	山口に入り、無許可で布教活動
12月	堺に上陸
天文20年(1551) 1月	京に到着 天皇・将軍への拝謁を試みるが失敗
3月	山口を経て平戸に戻る 平戸に置いていた献上品を携え三度目の山口訪問
4月	献上品を携え大内義隆に再拝謁 義隆、キリスト教の布教と信仰の自由を許可し 大道寺を教会堂として与える 豊後にポルトガル船が来航したことを聞きつけ 豊後に向け出発
9月	豊後到着 大友義鎮に拝謁、許可を得て布教活動
11月	インドゴアに向け出航

Ⅱ ザビエル来豊にかかる二つの記録

1 ザビエルの日本訪問を記した記録類

- 1) フロイス『イエズス会日本通信』×
- 2) メンデス・ピント『東洋遍歴記』…1578年までに執筆・体験記
※小説に過ぎないという評価
- 3) フロイス『日本史』…1586年執筆・自分が生きた時代の記録
※ザビエルに会ったのはザビエルが日本に行く前にゴアで
フロイスが日本を訪れたのは1563年～
- 4) ロドリゲス『日本教会史』…1615～1633年執筆
※日本に40年近く住み(1577～1610)日本に精通
しかし、ロドリゲスが生まれたのは1561年頃
ザビエルの死後である
- 5) ダニエッロ・バルトリ『イエズス会史』…1653年までに執筆

2 メンデス・ピント『東洋遍歴記』…1578年までに執筆

神父(ザビエル)は…豊後王国の首府である府中の町に向けて出発した。そして土曜日に神父の供をしていた三人のキリスト教徒が私達のもとに着き、彼らから船長ドゥアルテ・ダ・ガマは次のようなことを知った。すなわち頭痛のため、また、そこまで六〇レグアの道程を歩いて来たために足が腫れ上がっているのです、神父はそこから二レグアのピンラシャウという部落におり、身体の工合が悪いところから、回復して旅を終えるのには数日を要するか、あるいは、もし神父が受入れるならば彼の乗る馬が入用のようである、と。ガマは、…船が碇泊している港から一レグアの所にある町に居を定めて商品を買っていたポルトガル人たちに直ちに伝言を送った。彼らは…すぐにやって来て、…神父が病気になって留まっている場所まで彼を迎えに行くことに決まり、すぐにそれを実行した。そして私達は四分の一レグアとちょっと歩いた所で、その王国(大内氏)の重立った武士で改宗してからまだ一ヶ月にもならない二人のキリスト教徒に伴われて、神父がすでに道中をやって来るのに会った。…そして、私達は、いずれも晴着をまとい、立派な馬に乗っていたので、神父に出合った時、彼がミサをあげるのに必要な全ての物を入れた袋を背にして徒歩でやって来ており、これら二人のキリスト教徒がそれを背負うのを交互に手伝っているのを見て、たいそう困惑した。そして彼がどうしても馬に乗ることを承知しなかったのです、…私たちは徒歩で彼に従

わざるを得なかった。船が碇泊している日出川に着くと、示し得る限りのあらゆる喜びのしるしをもって彼は船に迎えられた。そして、すべての大砲が四度、彼のために発射され、ベルソ・ファルカン・カメロから六三発が放たれた。…それらは、山にある窪地に木霊してすさまじい響きを立てた。このとき町にいた王は、その物凄い音を聞くと、あまりの異常なことに驚いて、…何か海賊たちの船団と私たちが戦っているものと思い、何事であるかを調べるために、すぐに大急ぎで家来を一人派遣した。…翌日、夜が明けると、船長ドゥアルテ・ダ・ガマとすべての商人、および船にいた他のすべてのポルトガル人は、神父が王のもとに行くこの最初の訪問の仕方について相談をした結果、全員の意見によって次のように決まった。すなわち、神の誉れのために神父はできるだけ華麗ないでたちで行くべきである。…そして、この決定は、一部神父の考えに反しはしたが、しかし、その理由が挙げられると、神父は他の人の意見に譲歩せざるを得なくなった。こうして、私たち一同はすぐに各人がその時可能であった最高の支度をして、絹の日覆と旗を飾った船の舳舟と二隻のマンシュア船に乗って出発し、喇叭と横笛を時々交互に吹き鳴らして行った。その見慣れぬ様子は土地の人をひどく驚かし、波止場に私たちが到着した時には、どうにも[混雑で]下船できないほどであった

3 ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』…1615～1633年に執筆

福者パードレ(ザビエル)はいつものとおり、徒歩で行ったが、豊後でポルトガル人のためにミサをあげるのに必要な祭壇石や聖杯や祭服を入れた荷物を背負って行った。…こちらから海の向こうにある豊後の地へ渡るために乗船する港まで、二日間陸路を歩いたが、もう一年も歩いていなかったなので彼の足は腫れた。周防の陸路を二日間歩いたところで、彼は数人のポルトガル人に出会った。彼らはこのパードレのお供をして案内して来るように、ドウアルテ・ダ・ガマが向こう側にある豊後から周防の国へ船で遣わしたのであった。彼らはこの周防のある港で下船し、馬に乗って来たのである。彼らが福者パードレに出会ったのは内陸へ向かって半レグアほど来たところであって、前に述べた二人のキリシタン貴族と、パードレについて来たベルナルドとマテウスとが一緒であった。…彼らは馬に乗っていただくように強く言ったが、どうしてもパードレに承知してもらえなかったので、皆は徒歩で船のあるところまで行った。…彼は[ポルトガル]船のいた豊後の日出港へ向けて、そのポルトガル人たちと共にここで乗船した。…福者パードレ・フランシスコは豊後の日出港に着いた。ここは豊後国の首都府内の都市に近く、ポルトガル人たちの船が一隻ここに碇泊していた。

4 各記録が描くザビエルの来豊経路

- A メンデス・ピント『東洋遍歴記』
フロイス『日本史』
ダニエッロ・バルトリ『イエズス会史』

…山口～日出＝陸路 → 日出～府内＝海路

- B ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』

…山口(周防のある港)～日出＝海路 → 日出～府内＝海路

- ① ロドリゲスだけが周防(山口)から海路日出に来航したとしている
- ② すべての記録が、日出港経由だったとしている
- ③ すべての記録が、日出・府内間は海路としている



Ⅲ 近年の学説…ロドリゲスの説(山口から海路で来豊)が前提

加藤知弘『ザビエルの見た大分』… 日出港の存在すら否定
→周防から船で府内の港(沖の浜)に直行

「日出を府内の外港として利用するぐらいなら、他に距離的に近い
適当な港をあれこれ選べたはずである」

加藤が日出港寄港を否定した主な理由

- 1 「日出港に碇泊している船の礼砲の音が府内の人々を驚かせたとするのは、
距離的にも当時の砲の性能からいっても、少々無理がある」
- 2 「日出で本船から小舟に乗り換えて別府湾をわざわざ横断したとは
とても考えられない」

→ 史料には「絹の日覆と旗を飾った船の舳舟と二隻のマンシュア船に乗って出発した」
…この記述を日出で大船から舳舟に乗り換えて沖の浜に向かったと理解

➡ 近年の学術書はすべて、山口から海路で直接府内(沖の浜)に至ったと
記されるようになっている

IV ティセラの日本図

オルテリウス『世界の舞台』(1595年・ロンドン出版)の補巻第5巻に収載

ティセラ…1564–1604。イエズス会士の地図製作者でスペイン王室に仕える



ティセラ日本図に指摘できる点

- ①九州の東海岸には点々と港と思われる地名が書き並べられてあるのに対し西海岸の地理認識が曖昧である
- ②地図には長崎あるいは博多が記されておらず、かろうじて平戸と読み取れる地名はあるが海中に記され不正確である
- ③豊後の地名が極端に多く記されており、臼杵・佐賀関・府内・日出の地名を読み取ることができる

- 1 この地図は、長崎や平戸での南蛮貿易がさかんとなる以前に作成されたもの、と考えられる
- 2 地図が作成された当時のポルトガル船による貿易は、鹿児島を中継地として豊後府内が一つの目的地であったように読み取れる
- 3 当時府内への航路としては九州の東海岸を往来していたものと考えられる
- 4 3の点から考えるならば府内のさらに先にある日出港が認識されていた事実は、日出港に特別な意味・機能があったことを想起させる

➡ 府内のさらに西奥二〇^キ弱離れた所にある日出港に、
どのような特別な意味・機能があったのか？

V 別府湾の海底地形



本絵図の留意事項

- ・絵図は臼杵藩に遺されていたものであり、タイトルは不明
つまり、何のために書かれた絵図なのかは伝わっていない
- ・臼杵藩に遺されていたからといって、臼杵藩で作成されたものとは限らない
…臼杵藩は他者の持つ絵図を多数写して収集している
…内容的には、幕府領あるいは府内藩領の施設が記されている

絵図から読み取れること

…高崎山の東から三佐(岡藩の港)および
鶴崎(熊本藩の港)の先まで遠浅の海だった

➡ 府内の港沖の浜には補助港が必要だった … 佐賀関港・日出港

Ⅵ 日出港の姿

1 日出(青柳)港の海底地形



2 日出(青柳)港の湧水

⇒城下カレイの事例で有名

城下海岸地に湧き出る真水で育ったカレイは臭みがなく美味

→城下カレイ ... 幕府への献上品となる

⇒そもそもの新鮮な真水は遠洋航海にとって必要不可欠の物だった筈

... 青柳の海岸には大量の真水が湧き出している

※日出(青柳)港は

1 海底が深く、大船が近づきやすかった

2 海岸地に湧水があり、新鮮な真水が手に入りやすかった

⇒ポルトガル船での南蛮貿易にとって重要な港だった

加藤の主張

「日出を府内の外港として利用するぐらいなら、他に距離的に近い適当な港をあれこれ選べたはずである」



先に述べてきた理由から明確に反論することができる

加藤らが主張したザビエル日出港到着否定の理由

1 「日出港に碇泊している船の礼砲の音が府内の人々を驚かせたとするのは、距離的にも当時の砲の性能からいっても、少々無理がある」

⇒協蘭室『菡海漁談』(『協蘭室全集』1980)

「或人の聞伝る話に、瓜生島にて春く声、順風に送られては、深江の

人家にほのかに聞こえたりしと云」→ 日出・大分間で騒ぐ声が伝わっている！

…他に、熊本で始まった西南戦争が阿蘇で聞こえている

山口の脱隊騒動(明治維新)が鶴崎で聞こえている

2 「日出で本船から小舟に乗り換えて別府湾をわざわざ横断したとはとても考えられない」

→ 史料には「絹の日覆と旗を飾った船の舳舟と二隻のマンシュア船に乗って出発した」

…これを日出で大船から舳舟に乗り換えて沖の浜に向かったと理解

⇒ザビエル等がはじめから舳舟に乗って行ったわけではなく、本船で行くと

上陸のため沖合遠くで舳舟に乗り換えなければならなかったため、舳舟に乗り

換える位置を少しでも港に近い場所にするため、二隻の小さな船に分乗し

て向かった、と考えられる ※舳舟を連れて船団を組む事例は多い

加藤等が掲げた日出港を否定する二つの理由は、

➡ 原史料を否定しなければならないほど不自然な話ではなく、
原史料を訂正させる力はないと言わざるを得ない

VII ロドリゲスの記述(海路説)の評価

1 記録としての性格の違い

ピント『東洋遍歴記』(1578年までに執筆)

フロイス『日本史』(1586年執筆)

…ザビエルと交流したことがあり、それぞれ自らが生きて直接間接に見聞きした時代の出来事を記録したもの

ロドリゲス『日本教会史』(1615年～1633年執筆)

…生まれる前の出来事を文献などを頼りに編纂したもの

しかも、日本退去後に主にマカオにて執筆→新たな史料・伝承には遭遇困難？

※しかし、ロドリゲスは日本に40年近く住み日本の地理に精通していた

2 山口・日出間の地理→下関海峡があり陸続きではない

→それに気づいていたロドリゲスは、ザビエル一行は必ず船に乗ったはずと考え、日出まで船で移動したと推測したのではないか？

∴ザビエル等が船で周防から日出に向かったとする根拠史料は見つからない

ただし、山口・府内の行程の1割(日出・府内)のみ船を使うという行程は誰が見ても不自然である

◎ しかし、ザビエルは宣教師である

⇒自分の姿を出会う村人たちに見せることによって

布教の足がかりとしたかったのではないか

∴足を痛めて歩けなくなった時も、出迎えの者がひいてきた馬に乗ることを拒否したと記されている→何故か？

∴最後に府内に向かうにあたっては、豊後の王大友義鎮に会うため、どのようにして会えば良いかガマ船長以下ポルトガル人全員で話し合った
その結果、ザビエルは船を使って可能な限り華麗な姿で行くべきだということになり、ザビエルはそれに従わざるを得なくなったとある

→日出まで歩いてきて日出～府内間のみ船を使ったというのは特に否定する必要もない自然な話ではないか？

VIII ピントが描いた日出港周辺のこと

ピントの『東洋遍歴記』にはあまりに嘘が多い

…『東洋遍歴記』は、冒険小説に過ぎない

岡村多希子訳『東洋文庫373 東洋遍歴記』(平凡社・1980)

⇒資料的価値はあるのか？

1 ピランシャウの記述について

…「(要約)ザビエルが足を痛めて港から2レグアのピンラシャウという場所で動けなくなったとき、連絡を受けたポルトガル船の船長ガマが、船が碇泊している港から1レグアの所にある町に居を定めて商品を売っていたポルトガル人たちに伝言を送り、ザビエルを迎えにやらせた」

①日出(青柳)港・平ノ庄(ピランシャウ)間 … 直線で約9km → 2レグア=8km

②平ノ庄 … 戦国大名大友氏の加判衆田北氏の拠点

足を痛めたザビエルが休息の場所を求め得る所

③港(青柳)から1レグアの所にある町

→ 青柳から4kmのところに頭成がある

… 頭成 中世の市場町 近世には森藩領の港(参勤交代のための)があった



ピントの記述は距離・土地勘・地域的特性、いずれも正確だった

⇒頭成にポルトガル人が住んでいたのか？

◎頭成にポルトガル人が住んでいたのか？

⇒フロイス『日本史』には …1596年の慶長豊後地震の津波被害地として

「沖の浜・浜脇・津留・日出・頭成・佐賀関の一部」と記されている

1 佐賀関のみ何故一部と記されているのか？

→佐賀関には上浦と下浦があり、別府湾に接した北浦は壊滅的被害を受けたが、下浦には被害を起こすほどの津波は回り込まず、被害を受けなかった … フロイスの記述はかなり正確である

2 津波は海岸部を均等に襲うはずである。しかるに、何故、大野川河口の鶴崎や津波被害の記録がある深江は記されていないのか？



フロイスの記録はすべてポルトガル人あるいはキリシタンから聴取した情報により作成されている →上記6地点にはポルトガル人が住んでいた



頭成にはポルトガル人が住んでいた！

おわりに

- 1 ザビエルは最後まで布教活動に忠実であった
- 2 平戸・長崎以前に、大友氏による日出港(佐賀関港)を使った南蛮貿易の時代があった
- 3 ポルトガル人が日出港を知ったのは中国のジャンク船からではないか
→日出には古代から中世の港辻間之浦(島山)があり
そこには白雉年中の中国船難破伝説があるという

